

# 私の一冊

歯科衛生学科 寺田 泉 先生

ミヒヤエル・エンデ著 『モモ』

小鹿図書館 943/E 59

ああもう毎日毎日なんでこうも忙しいんだろう。授業の準備をしないといけないし、締め切りが近づいているあの原稿もまだ書けてないし、研究もしなくっちゃ。やらないといけないことが山積みなのに気持ちは焦るばかり。もっと効率よく仕事をしないと。もっと時間があったらいいのに。1日24時間って短すぎない？どこかで時間を削らないと……。と思うことがよくある。そのたびに思い出すのがこの本である。

世界的に有名なエンデのベストセラー「はてしない物語」を映画化した「ネバーエンディング・ストーリー」を、私は中学生の時に観た。主人公のバスチアンが本の中に入り込み、『無』による崩壊の危機に瀕した世界を救うために冒険を繰り広げるストーリーに魅了された。そして20代の後半になった時にこの本に出会った。

この本は子供が呼んでも面白いだろうが、むしろ時間に追われたり生活に疲れたりしている大人にぜひともお薦めしたい。主人公の少女モモは、たった一人で町はずれの古い円形劇場に住んでいて、親もいないし、お金もないけれど、人の話を聞いてその話した人に自信を取り戻させてくれる不思議な力を持っている。だから大人も子供もたくさんの人がモモのところにやってきて、話を聞いてもらったり、遊んだりして元気になって帰っていく。しかし、ある時から誰もモモのところに来なくなってしまう。原因は「時間は貴重だ、無駄にするな！」「時は金なり、節約せよ！」と考えた人たちから、「時間貯蓄銀行」の「灰色の男たち」が言葉巧みに時間を奪っていたからだった。灰色の男達は「睡眠や食事、趣味やペットの世話や友人と会うことも無駄な時間だ。その時間を節約して貯蓄すれば倍になってかえってくる」と人々をそそのかし、時間をどんどん奪い、人々は時間を節約すればするほど生活が良くなるどころか、ギスギスとした毎日を送るようになる。そしてモモは奪われた時間を取り戻すための冒険に出る、というストーリーである。

1973年に出版されたにもかかわらず、まさに現代の私達の状況を表しているように思えてならない。より「便利」に、より「時短」を追及しているのに、生活は豊かになっているはずなのに、時間に追われて気持ちが豊かになっていないのはどうしてなんだろう、と深く考えさせられる本である。そして、その問いに対する答えと、大人に響く言葉がたくさん詰まっている本である。